

聖書：ダニエル 12：1～13

説教題：割り当ての地に立つ

日時：2015年2月22日

最初の1～4節は、前の章で語られた幻の続きで、そのクライマックスとなる部分です。11章の幻は、イスラエルのこれからの歩みについて心配し、とりなしの祈りをささげていたダニエルに与えられた幻でした。バビロンの国が滅亡し、時はペルシャの時代。クロスの帰還命令によって捕囚の民の第一陣はエルサレムへ帰りましたが、思わぬ妨害に遭って宮の工事が中止されていました。せっかく捕われの状態から解放されたのに、また暗雲が立ち込めて来ました。そんな中、3週間断食をして祈っていたダニエルに、神はどのような計画をお持ちなのか、今後イスラエルを今後どう導いて下さるのかを示すこの幻が与えられたのです。

簡単に振り返れば、11章の幻の内容は次のようなものです。ペルシャの後にはギリシャが起こる。そしてさらに南の王と北の王の戦い、すなわちエジプトとシリアの王の争いの期間が来る。そしてついに神の民を迫害する敵、アンティオコス・エピファネスが現れる。しかし彼は歴史の終わりに現れる究極的な神の敵の前兆にしか過ぎません。新約聖書で不法の人、最後の反キリストと呼ばれている人です。その彼は思いのまま振る舞い、あきれ果てるようなことを語り、神の民を苦しめます。しかしその彼についに終わりが来る。神のさばきが下るのです。そして彼を助ける者は一人もない。これが前回まで語られたことです。

12章1節に「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。」とあります。ミカエルはすでに10章13節に出て来た神の民を守る守護天使です。その彼が立ち上がるというのは、悪の力との最終決戦の時と言えます。その日にはかつてなかったほどの苦難が神の民に臨む。その時に、いのちの書に名の記されている人々の救いが実現します。ここに改めて教えられることは最後の救いの日の前には非常な苦難の日が来るということです。苦難と救いはセットなのです。そしてその時、2節に書いてあることが起こります。「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者へ永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。」すなわち死者の復活です。まず後者に注目したいと思います。11章45節では「ついに彼の終わりが来て」と述べられました。歴史の最後に現れる究極的な神の敵がさばかれます。しかしそれで終わりではないのです。ここに「そしりと永遠の忌みに」とあります。すなわち聖書のさばきは絶滅とか消滅で終わりになるものではなく、永遠に続くものです。

マタイ 25 章 46 節：「こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入ります。」

そして対照的に主に信頼し、従い通した神の民が受ける報いは永遠の命です。3 節には「思慮深い人々は、大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」とあります。マタイ 13 章 43 節：「そのとき、正しい者たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。」

ここに見ることは、結局最後には不公平なことはなくなるということです。この世だけを見るなら、理不尽なことがたくさんあります。神に逆らい、悪を行なっている人が栄えています。そして何らふさわしいさばきを受けず、安らかに死んで行きます。その一方、神を信じる者たちは約束されたものを何ら受けていないように見えます。空しい生涯だったようにも見えます。しかしそうではないことが分かる日が来るのです。やがてすべての人がよみがえらされて、神の最終的な審判がなされるのです。ヨハネ 5 章 29 節：「善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」

4 節でダニエルは「このことばを秘めておき、この書を封じておけ！」と命じられます。これは人々に知られないように隠しておけ！という意味ではなく、後の世代のためにしっかり保存せよ、ということです。4 節最後に「多くの者は知識を増そうと探り回ろう」とありますが、これはこの神の啓示を除いては、人々は真理を得ないという意味です。自分の知恵と力でそれを得ようとあっちこっちを探り回る試みは結局、徒労に終わる。唯一の答えは、この神の啓示、神の言葉にこそ見出されるということでしょう。

以上の幻が終わると、再びダニエルが立っていた川の岸辺の光景が映し出されます。彼はそこで兩岸に二人の人を見ます。その内の一人が、川の水の上にいる亜麻布の衣を着た人に問うたのをダニエルは聞いていました。「この不思議なことは、いつになって終わるのですか。」それに対して、亜麻布を着た人が答えます。彼はその右手と左手を天に向けて上げ、永遠に生きる方を指して誓って言います。「それは、ひと時とふた時と半時である。」この言葉は 7 章 25 節にも出て来ました。そこでも見ましたが、ある人たちはひと時を 1 年、ふた時を 2 年、半時を半年として、合計 3 年半を意味すると考えますが、ある人たちはそうでないと言います。いずれにしても、これを字義的に理解することには慎重でなくてはなりません。しばしばこのような箇所から世の終わりのタイミングを計算できるかのように主張する人がいますが、イエス様は「その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。」

ただ父だけが知っておられます。」と述べられたのですから、それを超えて何かを言おうとする人は、その時点で聖書から外れていると言わなくてはなりません。これは神のみがご存知のある期間を指しているとするのが良いと思われます。そしてここでもっと注目すべきは、その後の「聖なる民の勢力を打ち砕くことが終わったとき」、成就すると言われていることです。私たちはこれは逆ではないのか？と思うかもしれませんが、神の敵の勢力が打ち砕かれた時ではないのか、と。しかしそうではないのです。1節で見たように、神の民の勢力が打ち砕かれると表現されるような最大の苦悩の日が来るのです。しかしその時こそ救いが成就する時です。人間の目に救いの希望が全く消え去ったと思われるような状況に至って神の介入が起こる。ですから反対から言えば、この言葉をしっかりと握ってさえいれば、私たちはどんな状況でも希望を持てるのです。むしろ大ピンチに陥って、もう後がないという状況の中で、いよいよ救いが近いということを思うことができる。ルカ 21 章 28 節：「これらのことが起こり始めたら、からだをまっすぐにし、頭を上にあげなさい。贖いが近づいたのです。」

さてダニエル自身はこの終わりの時の状況について、もっと知りたいと思いました。そこで彼は間に割って入って質問します。8 節：「わが主よ、この終わりは、どうなるのでしょうか。」これに対して、亜麻布を着た人は答えます。9 節：「彼は言った。『ダニエルよ。行け。このことばは、終わりの時まで、秘められ、封じられているからだ。』」「行け」というのは、これ以上は答えは与えられないということでしょう。ダニエルが知ることができるのは、すでに語られたことまでです。しかしなおいくつかの大切なことが示されています。

一つは苦難は信者のきよめのために用いられるということです。「多くの者は、身を清め、白くし、こうして練られる。」悪者どもは神のご計画について何ら悟らず、自分たちの天下と繁栄はいつまでも続くように思って益々悪を行ない、滅びの道を進む。しかし思慮深い人々は神の御心を悟り、苦難の中でも耐え忍び、救いの日を待ち望む。こうして彼らはきよめられ、整えられ、天に入る準備をされるのです。

11 節には再び難しそうな言葉が出て来ます。「常供のささげ物が取り除かれ、荒らす忌むべきものが据えられる」という表現は 11 章 31 節にも出て来ました。そこではアンティオコス・エピファネスがエルサレム神殿を冒瀆し、ゼウスの神を祭ったことを指すものでした。しかしエピファネスは将来現れる究極的な神の敵の写しであり、その最後の敵が行なう最終的冒瀆・最終的迫害のことが、12 章 11 節で言われているのでしよう。その彼が現れてから 1290 日があると言われています。これはどういう意味でしようか。これは年数に換算すると 3 年半近くなります。ここから具体的な年数につ

いて色々述べる人たちがいますが、ダニエル書やヨハネの黙示録に出て来る他の数字と合わせて満足行く答えを出せる人はいません。これも神に知られているある期間を指しているものと見るにとどめるのが良いと思われます。しかし大事なことは、次の12節で「幸いなことよ。忍んで待ち、1335日に達する者は。」とあることです。すなわち1290日間続くが、1335日間耐え忍ぶ者こそ幸いということです。すなわち苦難を越えるように堅忍することが大切であるということです。マタイ24章13節：「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」

それゆえ、ダニエルにはこう語られます。「あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。」「休みに入る」とは死の婉曲表現であり、これは「死に至るまであなたは忠実に歩みなさい」ということでしょう。そうする時、あなたは時の終わりに「あなたの割り当ての地に立つ」。この「割り当ての地」という言葉は、約束の地を分配したヨシュア記で何度も使われた言葉です。神はそのように復活後の天に割り当ての地を用意してくださっている。ダニエルはどんな苦しみに地上で遭遇しても何も失わないのです。だから最後まで忠実に歩み、この神の祝福に入るように！と語っているのではないのでしょうか。

ダニエル書を読んで思わされることは、この書で語られていることは紀元前6世紀ばかりでなく、今日の私たちにもぴったり当てはまるメッセージを語っているということです。今日も様々な国が自分たちの一層の影響力と支配権を求めて、その力を誇示しています。一体これからはどの国が生き残るのか。次に何が起きるのか。私たちの予想もしない形で世界が動いて行きそうな状況があります。その中で悪が幅を利かせ、人々を脅かし、やみの力が世界を色濃く覆っているようにも思われます。しかしこの書から改めて教えられることは、世界の真の主権を握っているのは主なる神であるということです。主こそ一切の出来事をその御手に掌握しておられるお方です。主はこれから先のことも詳細に知っておられますし、それを定めておられます。この方の前に想定外のことは何一つありません。そしてこの神が最後にふさわしいさばきをなされます。それまでは神の正義や神の主権が見えない時があります。悪が勝ち誇り、主に敵する国や王や勢力が力を持っているように思われる時があります。しかし歴史の最後に主は必ず一人一人に報いをお与えになります。先に死んだ者もよみがえらされて、一人一人この方の前に立たされ、地上で行なったわざに応じて永遠に続く報いを受けるのです。

このことを受け止める時、私たちの心は定まるのではないのでしょうか。悪が見逃されたまま終わることはありません。結局それはいつかさばかれます。ですからうまく

この世を乗り切ろうとして、それらに乗っかる必要もありませんし、それらにおもねる必要もありません。私たちは主に信頼し、主にこそ従う道を歩んで行けば良いのです。その結果、思わしくないことが起こって来るかもしれません。しかし主はそこにも何らかの計画を持っておられます。私たちに全部は分からなくても、主はご自分がしておられることを良くご存知です。そしてそのことを通して私たちをきよめ、天に入るのにふさわしい者へと造り変えてくださいます。もしこれ以上は考えられない最大の困難に至っても、私たちは慰めを持つことができます。それは救いがいよいよ近いという証拠だからです。神は耐えられない試練は決して与えず、ちょうど良い時に救いに導き入れようとして、私たちを守り導いてくださっています。ですから私たちは心かき乱されずに、主にこそ信頼し、平安をいただいて、主に従う歩みへ進みたいと思います。主は必ずご自身の御心を成し遂げ、信頼する者たちを救ってくださいませ。ダニエル書は迫害や困難の中でも、この主権者なる主に信頼の目を高く上げ、終わりまで忠実に従って来るようにと私たち一人一人を励ましている書なのです。「幸いなことよ。忍んで待ち、1335日に達する者は。あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。」